

書評

山田昭次『金子文子―自己・天皇制国家・朝鮮人』（高柳）

山田昭次『金子文子―

自己・天皇制国家・朝鮮人』

高柳俊男

評者が黒色戦線社版の金子文子獄中手記『何が私をかわさせたか』に初めて接したのは一九七九年、大学四年の時であった。「こんな日本人もいたのか」という新鮮な感動で一氣に読んだことは、今でも記憶に新しい。

山田昭次氏の本書はその金子文子の評伝で、数年間の雑誌連載を経て、彼女の没後七〇周年にあたる昨年末に上梓された。上記手記や『朴烈・金子文子裁判記録』（黒色戦線社）に収められた膨大な調書類はもちろん、朝鮮語新聞を含む新聞記事やその他の史料を丹念に読み解き、関係者や現地への取材を行い、また従来の研究を批判的に検討する中で、金子文子の歩んだ道ととりわけその思想が綿密に再構成されている。

文子の生涯のうち著者がもっとも関心を抱くのは、その朝鮮や朝鮮人と係わる部分であろう。つまりどうして当時の日本人としては極めて例外的に、植民地下で悲惨な状況に置かれた朝鮮人に共感し、三・一独立運動に他人事とは思えないほど感激し、在日の朝鮮人活動家たちと運動を共にし、ついには最愛の伴侶である朴烈とともに天皇制と真っ向から対決していくことができたのか。しかし本書ではそれのみを取り出すのではなく、彼女の人間形成の全過程を明らかにする中でその問題を考えようとしている。ある個人の朝鮮観をその人の全体から切り離して論ずる方法的欠陥は著者のかねてから指摘するところだが、本書はいわばその方法的主張を自ら実践した作品だとも言えよう。

本書によれば、金子文子の思想形成にまず大きな影響をもったのは、父が母を入籍せず、子を母の籍に私生児として入れることも認めなかったため、彼女が無籍者とされたことである。そのため学校にも正式な形では入れず、ようやく入学を許可された後もさまざまな差別を受けた。没落していながらも家の格式を誇示する権威主義的な父、男への依存なくしては生きられない母のいづれもが、幼い文子にとって反面教師となった。複雑に乱れた家族関係から、彼女は子供のときから横浜・山梨・浜松・朝鮮の美江など家族や親戚のあいだを転々とされ、冷遇や虐待を受けると

同時に醜悪な人間像を見せつけられた。

そうしたなかで、文子が女であったことの意味も大きいとみる。今とは比べられないほど女性の自立が抑制されていた当時の日本社会にあって、文子は家父長的権威下での従属を嫌い、それを打破することで自己実現を果たそうとしていく。それはやがて家を飛び出し東京で苦学する道を選ばせるが、十七歳の彼女の心にはまだ勉強して「偉い人」になりたいという上昇志向もあった。だが東京で社会変革を志す若者たちの姿に接し、彼・彼女らと交流していくなかで、自己の生き方がより研ぎ澄まされていく。しかし同時に、理論と異なる私生活を平気とする社会主義者個人への人間的不信感や、革命後それ自体がまた一つの権力となりかねない理論に、社会主義思想への疑問も感じる。そんな中で出会ったのが朝鮮人の朴烈であり、自分に最も納得のいく思想としての無政府主義ないし虚無思想であった。つまり金子文子自身が幼少期から社会の底辺で抑圧を受けたアウトローの人間であったからこそ、「不逞鮮人」と目された朝鮮人との連帯や天皇制国家との対決が可能であったと著者はみている。もちろんその抑圧に押し潰されてしまいう人間や、逆に権力への激しい擦り寄りを見せる人間もいるから一概には言えないだろうが、本書の記述を読む限りその論旨には説得力がある。

史苑（第五七卷二号）

本書はこうした文子の思想形成過程だけではなく、彼女の人生のクライマックスとも言うべき関東大震災に際しての逮捕、非転向と大逆事件への仕立て上げ、死刑の判決と恩赦、監獄での自死などの過程と、そのなかでの思想の変化も丁寧に分析されており、通説への疑問も呈されている。また巻末には資料として、文子と朴烈の書簡集、文献目録、年表類も付されている。

「あとがき」で著者は、敗戦後「民族的自信喪失症」に陥り、一時は福沢諭吉の合理主義に救いを見出したが、やがて彼も朝鮮侵略論を唱えていたと知るに及んでまた救われない気持ちになった。そんな折に金子文子と出会い、天皇制に抗して朝鮮人と共闘する中で自己を貫いた生き方を知ることによって「民族的自信喪失症」から救われたと書いている。評者は命をかけて天皇制と対峙した文子のように極限をきわめた人だけでなく、ある時は状況に流され、またある時にはそれに抗ったような市井のごく普通の庶民の人間臭い生き方のなかにも、日本人として十分に「救い」ないし「誇り」とするものがあるのではないかと、とも思う。ともあれ、「本書は戦後一人の日本人として私が歩んだ思想的遍歴の産物」と自ら記すように、金子文子の生涯が著者自身の生き方や、そしておそらくは著者が全身を傾けて救援した徐兄弟の生き方とも重ね合わせられており、著者の執

山田昭次『金子文子―自己・天皇制国家・朝鮮人』（高柳  
念のようなものを改めて感じる一冊である。

（山田昭次『金子文子―自己・天皇制国家・朝鮮人』、  
影書房、一九九六年、本体価格三八〇〇円）

（明星大学助教授）